

大学時報

U N I V E R S I T Y C U R R E N T R E V I E W

No.382

2018

9

隔月刊



創立90周年記念事業の一環として整備された御井キャンパスのシンボルとなる御井本館(左奥)(久留米大学)

特集 自校史と大学博物館

座談会 I Rの実践の現状

小特集 新入生イベントの今

明日への試み 大谷大学

わが大学史の一場面 東洋大学

加盟校の幸福度ランキングアップ

松山東雲女子大学／成蹊大学／清泉女子大学

クローズアップ・インタビュー

大蔵流狂言師 善竹 富太郎さん

日本私立大学連盟



落成当時の共立講堂（1938年 落成） 共立講堂前の白山通りには都電が走っていた。



現在の共立講堂 隣には15階建ての本館（2003年秋 落成）が建つ。



久留米大学は、2018年4月に創立90周年を迎えました。



久留米大学の本館と創立に尽力された石橋正二郎氏の銅像

地域への思いを今に受け継ぐ

久留米大学の歴史は、1928(昭和3)年に創立された「九州医学専門学校」に始まります。地方の医師不足を解消するため医学専門学校創設の名乗りを上げ、これまで数多くの医師を輩出し、地域医療の充実発展に寄与してきました。その後、医療のみならず地域の産業、文化にも目を向け、現在では6学部13学科、4大学院研究科、附設中学校・高等学校、臨床検査専門学校、および2つの附属病院を擁する西日本有数の総合大学へと発展を遂げました。

創立にあたっては、ブリヂストンの創業者である石橋正二郎氏とその兄である徳次郎氏により、広大な土地と3階建ての立派な建物が寄贈され、その建物は、現在も大学本館として歴史を刻み続けています。



初代理事長
溝口喜六氏



九州医学専初代校長
伊東祐彦氏



石橋徳次郎氏



四代理事長
石橋正二郎氏



九州医学専門学校第1回入学式 開設当初の大学本館



開院当初の附属病院



戦後間もない頃の授業風景



商学部開設時の正門と附設高等学校の正門



御井キャンパス(S.25)



総合外来診療棟落成(S.39)



50周年タイムカプセル(S.53)

地域と未来のかけ橋へ



創立90周年記念 事業紹介

創立90周年記念事業

- ・基礎3号館の新築事業
(研究棟・動物実験センター)
- ・病院北館の新築事業
(総合複合棟・放射線腫瘍センター)
- ・御井学舎施設設備整備事業
- ・附設中学校・高等学校
施設設備整備事業
- ・医療施設設備整備事業



4月28日の創立記念日に行われた記念式典の様子

節目となる2018年の創立90周年を機に、本学が「地域と共に発展する大学」を目指していくため、各種新築事業など、さまざまな記念事業を行いました。

その事業達成に向けた募金へのご協力を呼びかけたいしまして、趣旨にご賛同いただきました皆さまから多大なるご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

実施した5つの事業のうち、新築した施設を中心に、文系学部のある御井キャンパス、医学部のある旭町キャンパス、それぞれの事業を紹介いたします。

御井キャンパス



憩いの広場



ラウンジ



ホール



ラーニングcommons

御井キャンパスの新たなシンボル
学生が主体的に学ぶ環境を提供

御井キャンパスの新たなシンボルとして、入学志願者の確保に向けたさらなる教育、研究環境の充実を目的に抜本的なキャンパス整備を行うべく、「快適な教育環境を追求した設計」のもと、御井本館は建築されました。

地上10階建てで、第1期工事は、2015年1月に竣工、第2期工事は、2016年9月に竣工し、12月から本格運用を開始しました。第3期工事として、2017年8月に、御井本館と既存の施設を穏やかでやさしい緑地で包む御井キャンパス総合整備工事が完了しました。

御井本館周囲に設けられた2つの広場（出会いの広場、憩いの広場）には、芝生が敷かれ、授業に向かう途中や学習後の学生たちの心をリラックスさせ、学生教職員の出会い、憩いを演出する造りとなっています。

構内は、やわらかい照明にこだわり、穏やかに学べる環境を提供しています。また、ラウンジやラーニングcommonsといったスペースを配し、「ラーニングcommons」では「新たな学びの場」として、学生がディスカッションを行いながら主体的に学ぶための柔軟な空間を提供しています。上層階には、ピアノ練習室や保育演習室なども設け、目的に応じた快適な環境が整備されました。また、8階スカイラウンジからは久留米市街を見渡すことができます。

これに附設中学校・高等学校施設設備整備事業も加え、本学の教育環境が大きく改善され、機能充実を図ることができました。

旭町キャンパス

「基礎3号館」 研究棟・動物実験センター 6階建て



研究機能の集約・効率化を図り
医学部生の学びの環境も整備

主に医学部生・大学院生および研究者が利用する施設です。1階には、医学部生などが利用できるeラーニング対応のコンピュータ実習室や最新のAV機器を配備したセミナー室などが設置され、カフェスペースを含めた3つのゾーンに分かれたラウンジが設けられました。2・3階には、キャンパス外にあった「分子生命科学研究所」とキャンパス内で離れた場所にあった「循環器病研究所」が入り、研究機能の集約・効率化が図



コンピュータ実習室



カフェスペース



セミナー室



ラウンジ

られました。一部には企業等が利用できるベンチャースペースも設けられ、4・6階の動物実験センターは、従来の4倍以上のエリアを確保し、最新の設備を備えた施設となりました。1階のラウンジを中心に、学生と研究者がリラックスして自由に交流できるスペースフロアとして、新たなアイデアの萌芽、モチベーションの向上につなげる、まさに次世代を担う学生の育成に最適な環境が整備されました。また、異なる附属研究所・センターを集約することにより、共同研究活動の推進が見込まれ、新たな研究成果の創出も期待されます。

病院北館(総合複合棟・放射線腫瘍センター) 5階建て



九州初の機器を導入し
幅広いがん治療が可能に

1階の「放射線腫瘍センター」には、放射線治療機器を2台と温熱療法治療機器1台を新たに導入し、より効率のいいがん治療を行うことができるようになります。さらに、体制的にも、多くの経験をもった放射線治療医師、専任の放射線治療技師、物理士、品質管理士、放射線治療専任看護師などのチーム医療により、根治から緩和治療まで幅広いがん治療が可能となり、地域におけるがん拠点としての機能が充実します。

2階以上は、「臨床研修センター」などが入る総合複合棟で、臨床研修医などの環境も整備されました。



サーモトンRF-8

「山本ビニタ社製のハイパーサーミア装置」温熱療法最新の機器を導入。放射線治療・化学療法・免疫療法と併用することができ、単独でも治療できます。電磁波（ラジオ波）エネルギーを利用して、患部を40～42℃に加温し、がん細胞を攻撃する装置です。



ラディザクト

「アキュレイ社製の最新トモセラピー」九州1号機として導入されます。放射線治療前にCTを撮影し、治療部位を確認したうえで放射線治療を行うため、正常組織への影響を最小限にすることができます。今までのトモセラピーより短時間で的確に病巣を治療することができます。



トゥルービーム

「バリアン社製の高精度リニアック治療装置」既存の機器に比べ、放射線照射の時間が従来の1/2～1/3に短縮されます。さらに、この装置にX線画像システムと福岡県初となる赤外線導システムを搭載することにより、短時間に正確な位置照合ができるようになります。

放射線腫瘍センターに
導入される
最新治療機器



子どもたちの元気な笑顔が、明るい未来の始まり

総合子ども学科

子どもの育ちを総合的に学び、地域の保育や子育てを主導する人材を養成。

2017年4月 新設 人間健康学部

地域を元気に
カラダごと まるごと。

1928年、九州医学専門学校を礎とし
90年近く地域に貢献してきた久留米大学に新学部が創設されました。

新学部の名称は「人間健康学部」。

幼児から高齢者まで人生“まるごと”生涯を通じた
健康づくりの支援をお約束します。

キーワードは「文医融合」。

久留米大学医療センターなどでの実習をはじめ、
本学の強みを生かした実践的人材の育成で、
これからも地方創生に貢献し続けます。

少子・超高齢化社会において
生涯求められる専門スキルをもつ人材へ
地方創生に貢献できる人材へ



誰もが生涯活躍できる地域社会のために

スポーツ医科学科

医学的な知識を備えてスポーツ教育などに取り組む人材を育成。

文部科学省の平成29年度「私立大学研究ブランディング事業」に採択

「私立大学研究ブランディング事業」
タイプA（社会展開型）に、本学が申請
した「すこやかな『次代』と『人』を創る
研究拠点大学へ～先端がん治療・研究
による挑戦～」事業が選定されました。



本事業は、「先端がん治療研究」をメインに展開しています。そこに、2017年「文医融合」を掲げ開設した「人間健康学部」など
「人」をテーマにした学部、大学院研究科等の組織が加わることで、大学を挙げて、地域における妊娠出産・子育て支援から
健康増進、疾病予防、高度な医療の開発・提供等に至る生涯サポートを目指しています。また、本学では、がんをテーマと
する多彩な研究に取り組んでおり、がんの新規診断法や治療法につながる可能性のある研究シーズが多数存在しています。
それらのシーズを発掘し、がんの早期発見・診断や治療法開発、さらには予防法へと応用展開を図るとともに、研究者を育成
することも重要な目的と位置づけています。

すこやかな「次代」と「人」を創り、地域と共に発展することのできる「研究拠点大学」を目指して事業を推進してまいります。

久留米大学組織一覧 (6学部13学科 4大学院研究科)

【学部学科】

- ◎文学部(心理学科／情報社会学科／国際文化学科
〈英語コミュニケーション専攻・国際文化専攻〉／社会福祉学科)
- ◎人間健康学部(総合子ども学科／スポーツ医科学科)
- ◎法学部(法律学科／国際政治学科)
- ◎経済学部(経済学科／文化経済学科)
- ◎商学部(商学科)
- ◎医学部(医学科／看護学科)

【大学院】

- ◎比較文化研究科 ◎心理学研究科 ◎ビジネス研究科 ◎医学研究科
- 大学病院 医療センター 附設中学校・高等学校 臨床検査専門学校



御井キャンパス(文系学部)



旭町キャンパス(医学部)



臨床検査専門学校



大学病院



附設中学校・高等学校



医療センター



久留米大学
KURUME UNIVERSITY

大学時報

No.382

2018.9



すこやかな「次代」と「人」を 創る研究拠点大学へ

永田 見生

● 学校法人久留米大学理事長、久留米大学学長

久留米大学は、九州医学専門学校を礎として発展し、2018年4月に創立90周年を迎えました。

2017年には、文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」に「すこやかな『次代』と『人』を創る研究拠点大学へ」先端がん治療・研究の挑戦」という事業名で採択され、同窓生の横倉義武日本医師会会長が世界医師会長に就任するという大変誇らしいニュースもありました。本年は創立100周年に向けたスタートラインと認識し、教職員の叡智を集結し、躍進するために努力してまいります。

仏教系大学の未来に思う

齊藤 昇 ● 立正大学長

はじめに

多くの大学関係者に賛同いただけるのではないかなと思うが、一般にキリスト教系大学というと華があり、仏教系大学というところか若干の地味な、よくいえば落ち着きのある印象を与えることが多い。洋の東西が日本人に与える印象の違いといってしまうとそれまでもかもしれないが、大学のブランド力が求められる昨今にあつて、大学のバックグラウンドが持つ影響力というのは無視してはならない要素である。

本来、「キリスト教系—仏教系」あるいは「華がある—地味」という軸と、上下優劣は何の関係もない。しかしこうしたこともあつてか、仏教系大学は、その宗教性をあまり表に出さないことが多い印象を持つ。実際、2013年度時点の宗教系大学の学則に

おける、宗教的行事や宗教的必修科目の設置率は、キリスト教系や神道系に比べ、仏教系大学が低く、運営構成においても、理事長職を除けば理事・幹事・評議員などの選任に宗教性の定めのある割合は、仏教系大学において低いとのことである（齋藤崇徳『日本における宗教系大学の比較分析…制度的変数を中心として』東京大学大学院教育学研究科紀要 第五十三巻 2014年）。

もちろん、神道系やキリスト教系の大学に対抗しようという意図があるわけではないことは念のためお断りしておく。また、時代の変化にとらわれずに仏教性を前面に掲げ、その使命を社会に示し続けてきた大学も多く存在することはいうまでもない。とはいえ、長きにわたって日本の精神性の支柱の一つであり続けた仏教を土台とする高等教育機関が、気

後れすることなく建学の精神を掲げ、日本の中で十分な役割を果たすことができていたのかという点は一考の余地があるように思われる。

例えば仏教系大学とキリスト教系大学の歴史を見比べると、そもそもわが国における大学制度確立の黎明期から、その設立の背景や教育目標、社会の中での立ち位置などが異なっていたようである。こうした事情は、現在の姿を振り返る上でも踏まえておくべき点であろう。

1 明治—大正期の仏教系大学

自学を例に挙げて恐縮であるが、本学は1872（明治5）年の小教院を起点とし、1904（明治37）年に日蓮宗大学林、1907（明治40）年に日蓮宗大学へと改称し、大学令のもと、1924（大正13）年に立正大学の設置へと至っている。他の仏教系大学と同様、元々は僧侶の養成機関であった。

本学のように明治以前に起源をもつ仏教系の大学は、学林・学寮・檀林などの名前で、自宗の僧侶養成機関として設置されたものがほとんどである。また各大学とも、1919（大正8）年施行の大学令以降、

順次正式な大学となるまでは、「大学」と名乗ってはいても、私立学校令（明治32年）および専門学校令（明治36年）などの法令上は専門学校という位置付けであった。

教育社会学・高等教育論を専門とする天野郁夫によれば、1914（大正3）年度における私立専門学校53校の中で、宗教系の学校の占める割合は22校の42%にも上り、内13校が仏教系であったという（天野郁夫『大学の誕生（下）』中公新書 2009年）。各校の規模は決して大きくはないものの、わが国の近代における高等教育史の初期から、仏教系大学は一定の存在感を持っていたといえる。

また、量だけでなく歴史の面からも、仏教系大学の持つ重さは大い。本学も、1580（天正8）年に日蓮宗の教育機関として今の千葉県匝瑳市に開かれた檀林を淵源としており、その歴史は実に400年以上である。本学以外にも、その成り立ちをたどれば、数百年の歴史を持つ仏教系大学は少なくない。いささか尊大な言い方ではあるが、少なくともその年数だけを見れば、中世に設置されたボローニャ大学やパリ大学には及ばないものの、欧米の有名諸

大学に匹敵する歴史を持つといえる。

このように仏教系大学は、歴史の長さや学校数といった面からみても、一定の規模を有している。しかし各大学が、当時の社会の中で明確な役割を果たすことができていたかといえ（当初の建学の精神自体が現在とは質的に異なっているとはいえ）、必ずしもそうではないようである。

わが国で高等教育が少しずつ拡大していった明治大正の時期にあつて、それぞれの仏教系大学は、改革を目指す「近代派・改革派」と伝統に固執する「保守派・守旧派」とが抗争を繰り返して、改革は一向に進まない状況であつたという（天野郁夫『大学の誕生（上）』中公新書 2009年）。時代の転換期に、旧来の体制・制度と改革の波とが軋轢を起こすことはいつの世にもみられることであり、現在も多くの大学がこうした葛藤に直面しているかもしれない。しかし、明治以前から大正期にかけての大きな社会構造の変化を思えば、その摩擦は相当なものであつたろうと推察する。仏教系大学における歴史の初期には、旧来の歴史と伝統を背負うが故の、羽化への大きな困難があつた。

2 キリスト教系大学の困難

もちろん、仏教系学校だけが困苦を体験したわけではない。キリスト教系の学校にはキリスト教系の学校としての困難が存在した。元々プロテスタント系の各教派にとって学校の設置が布教の重要な手段とされていたように、キリスト教系の多くの学校は、当初から聖職者の養成よりもキリスト教主義に基づく教育に比重を置いていた。先に挙げた天野によれば、明治当初の多くのキリスト教系学校における高等教育課程では、米国のリベラルアーツ・カレッジをモデルにした英語中心の高等普通教育を行っており、仏教系大学がその改革に苦心するかたわらで、当時としては先駆的な教育体制を有していた。

しかし、中学校令と帝国大学令交付以降、官学中心の教育体制整備が進む中、内村鑑三の不敬事件（明治23年）に象徴される教育と宗教の衝突などを契機に、キリスト教系学校に対する風当たりは次第に強くなり、明治の中頃には停滞の時代を迎えることになったという。特に、一定の要件を満たした中等・高等教育機関は学生の徴兵免除が得られるという、

学生募集上の大きなメリットを得るため、各学校が認可を得ようと体制整備を進める矢先、私立学校令と同時に出示された「訓令」において、認可を得るには教育課程の中で宗教的教育・儀式を行ってはならないことが定められた。こうした状況下で、各学校は認可かキリスト教教育かのいずれかを放棄する岐路に立つことになる（前掲『大学の誕生（上）』）。いずれの道を選ぶかは学校によって分かれたようであるが、認可の道を放棄した学校では、退学者が相次ぐなど、経営上の危機に見舞われたそうである。

3 仏教に根差した教育のあり方を模索する

仏教系大学が明治大正期に直面した僧俗共学化への課題が、今の構造へと直接続いているわけではないものの、多くの仏教系大学は設立の当初からそのあり方に迷いを抱えていたことは確かである。そして現在もまた再び、仏教系大学は自らの役割を模索する時期に至っているように思われる。そのような時流の中で、旧来の価値を無理に復古させようとするのでもなく、「仏教系だが、華がある」といった、

急な背伸びをするのでもなく、仏教が本来有している価値を持つ、この時代に応じた役割や意義を堂々と打ち出すことが重要であろう。

私は、仏教の持つ重要な価値の一つは、生老病死を見つめる、生きとし生けるものへの温かいまなざしであると考ええる。残念ながら未来を楽観的に語ることの難しいわが国の不確実な時勢にあつて、人々はある実存的問いに直面することもますます多くなると思われる。そのような中にあつて、仏教精神が果たす役割は非常に大きいはずである。

仏教系各大学は、1994（平成6）年に、共同で仏教系大学会議を設立している。2017年10月には第24回仏教系大学会議総会・研修会が開催された。ここでは、「日本における仏教系大学の使命（ミッション）を考える」と題して基調講演やディスカッションが行われ、活発な意見交換が行われるとともに、さまざまなアイデアが出された。こうした流れを踏まえ、今後、仏教系大学間でますます連携・協力を深めるとともに、仏教以外の宗教との積極的な交流を図りながら、仏教的精神・価値に根差した人材育成・社会貢献が広がっていくことを願っている。